

# The Husband ' s Messageのspeaker について

著者	船井 純平
雑誌名	名古屋学院大学論集 言語・文化篇
巻	27
号	2
ページ	87-96
発行年	2016-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15012/00000663">http://doi.org/10.15012/00000663</a>

[論文]

## *The Husband's Message* の speaker について

船 井 純 平

名古屋学院大学経済学部

### 要 旨

古英詩 *The Husband's Message* は1人称の speaker が話を進める形式となっているが、この speaker がはっきり特定されていない。この詩の表現や内容および写本の構成などを考慮すると、speaker が人間の messenger であると考えなければならない必然性はなく、擬人化された rune-stave によって語られていると考えるのが適切である。

キーワード：古英詩，擬人化，語り

## The Speaker in *The Husband's Message*

Jumpei FUNAI

Faculty of Economics  
Nagoya Gakuin University

## はじめに

古英詩 *The Husband's Message* (以下 *HM*) は、写本の保存状態をはじめとして解釈をするにあたっての問題点が多い作品である。この詩は1人称の *speaker* が自己の来歴から語り始めて話を進める形式となっているが、この *speaker* が擬人化された *rune-stave* なのかあるいは人間の *messenger* であるのかということに関してもしっかりしていない。本小論では、この *speaker* についての問題を考察したい。

## 1 *speaker* に関する議論

*HM* の *speaker* の問題に関してはこれまでしばしば研究者の注目を集めてきたが、多数派であるのは *speaker* を人間の *messenger* とするものである。この中で代表的な説が R. F. Leslie によるもので、擬人化された *rune-stave* が語っていると考えると問題がある記述として4つの点を詳しく述べている。

まず、第一の点は6行目にある *speaker* による *Ful oft ic on bates*<sup>1)</sup> という記述に関するものであり、それは以下のように指摘されている。

First, he has been in the habit of making frequent voyages (6), behavior not reconcilable with a particular *rune-stave*, whose significance is for the one voyage from the husband to his wife.<sup>2)</sup>

これは、該当箇所 *oft* 'often' が一回限りのメッセージを送るためのものと考えられる特定の *rune-stave* を言及するにはふさわしくないということである。次に、13行目における「この木を彫った者」とする記述により *speaker* と *rune-stave* が別のものであることが示されているとして次のように述べている。

Secondly, the *speaker's* reference to the man *sé þisne bēam āgrōf*(13) suggests that the *speaker* and the *rune-stave* are not one and the same person, especially since the *speaker* has already referred to himself directly as *mec* in line 3.<sup>3)</sup>

上記の主張は、3行目に使用されている人称代名詞 *mec* 'me' と13行目の *sé þisne bēam āgrōf* 'who engraved this wood' という表現が根拠となっている。

さらに、本文で数回にわたって言及されている *speaker* と主人の関係を表す表現が、主従関係を表すものであることが挙げられている。

Thirdly, the terms he uses of his master, *mondryhten mīn*(7), *mīnes frēan*(10) and *mīn wine*(39), indicate a lord and retainer relationship with which the limited and temporary nature of a *rune-*

stave appears incompatible.<sup>4)</sup>

ここで問題になっているのは7行目の *mondryhten mīn* ‘my liege-lord’ や10行目の *mīnes frēan* ‘my lord’, また39行目の *mīn wine* ‘my lord (friend)’ という表現が rune-stave と主人の限定的な関係に合わないということである。最後に、30行目以降で用いられている動詞 *sægde* ‘said’ は、物である rune-stave よりも人間の messenger にふさわしいことが指摘されている。

Finally, in lines 30 ff. the speaker is recounting what the husband told him — *þæsþe hē mē sægde*(31); the verb *sægde* is much more appropriate to a human messenger than to a rune-stave whose function is essentially the conveyance of a written message.<sup>5)</sup>

これは、*sægde* が書かれたメッセージを伝える rune-stave よりも人間に使用された方が適切であるということである。

以上の根拠に基づいた Leslie の説に対して、Stanley B. Greenfield<sup>6)</sup> および Margaret E. Goldsmith<sup>7)</sup> は同意し、speaker は人間の messenger であるとしている。また、Earl R. Anderson<sup>8)</sup> は当初は詩の途中における messenger から rune-stave への speaker の変化を指摘していたが、後に speaker は人間の messenger であるとする説に変更している。

これらに対して、Peter Orton<sup>9)</sup> は Leslie が根拠としている点に反論した上で speaker は rune-stave であるという立場を取っている。このように意見が分かれている speaker の問題を考えるにあたり、以下ではまず speaker を特定する際に問題となる表現について見ていくことにする。

## 2 speaker に対して使用される語彙

これまでの議論は speaker に対して使用されている語彙を根拠にしている場合が多い。ここでは、使用されている表現から speaker を特定することが可能であるのかどうかを検討したい。*HM* の冒頭では、*ic tudre aweox* という表現によって speaker の来歴が述べられている。ここにおける *tūdre* は *tudor* ‘a child, offspring, fruit’ の与格、単数であり、この語は人にも植物にも使用されるものである。<sup>10)</sup> 古英詩 *Genesis*, 1.988 では比喩的に「小枝」の意味で使用されており、古英詩 *Rune Poem* の B ルーンに対するスタンザでは植物の「種」に対しての使用例が見られる。次に、*āwēox* は動詞 *aweaxan* ‘to wax, grow’ の過去、単数で ‘grew up’ を意味している。この単語は *Maxims I*, 1.55 で木が「育つ」の意味で使用されている。さらに、*Phoenix* では不死鳥が「育つ」ことを意味しているが、人間が育つという意味でもしばしば用いられる動詞である。このように、*tudor* および *aweaxan* に関しては人間、植物に共通して用いられるものであるため、どちらが意図されているかということがはっきりしない。

*HM* 6行目における *Ful oft ic on bates* という記述に関しては、上で見たように *oft* ‘often’ が一回限りのメッセージを送るためのものと考えられる rune-stave の性質<sup>11)</sup> に合わないとの指摘がされ

ている。これに対してOrtonは擬人化された物に対して個別の性質ではなく、一般的なその物の性質に言及している例を挙げており、<sup>12)</sup> *Riddle 65*の想定される解答である‘onion’や*Riddle 11*の‘beaker of wine’がこれに該当するとしている。これらの例は*HM*の6行目が同様の記述法である可能性を示唆するものであり、上記のoftという表現がrune-staveに適応されていても問題がないといえる。また後年の羊皮紙に書かれている文字と異なり、石や木に彫られたルーン文字はそれらの材料を削ることで容易に再利用することができた。そこからこのような記述がされていると考えることも可能である。

*HM*7行目のmondryhten min ‘my liege-lord’, 10行目のmines frean ‘my lord’, あるいは39行目におけるmin wine ‘my lord (friend)’という表現に関してはすでに見たように、擬人化されたrune-staveよりも人間を言及するのにふさわしいという指摘がされている。これらは確かにheroic poetryで主君と家臣の主従関係を示す文脈においてしばしば用いられる表現であるが、後に詳しく見るように擬人化された物とその所有者を表す文脈においても同様に使用されるものである。また、13行目では、Hwæt, þec þonne biddan het se þisne beam agrof ‘Listen, he who engraved this wood bade me beseech you’<sup>13)</sup>と述べられている。この箇所では、‘this wood’と‘me’は別のものであると読み、このことから上で見た通りspeakerとrune-staveは別のものであるとする主張がされている。しかしながら、これに類似する表現は*The Dream of the Rood*にも見られるものであり、<sup>13)</sup>ここでもやはりspeakerをはっきりと決定する根拠にはなり得ない。

以上で見てきたように、speakerに対して使用されている語彙は人間にも擬人化された物にも共通して適用されるものである。このことがspeakerの正体に対して複数の説が提唱され、また決着を見ないことの一因にもなっている。さらに、これに加えて写本の悪い保存状態もこの問題を考えるにあたっての障壁である。写本中で*HM*の書かれている部分は火災による損傷を受けた箇所があり、特に詩の冒頭でspeakerの来歴を示す部分に大きな損傷が見られる。このため、解読できない行が存在することによりspeakerの特定を一層難しいものになっているのである。これらの理由から、いくつかの先行研究に見られるようにspeakerに言及する語彙および表現のみに基づいてspeakerを特定することは困難であるといえる。

### 3 擬人化による表現

すでに見たようにspeakerを人間のmessengerとする説は、speakerに対して使用されているmondryhten min ‘my liege-lord’やmines frean ‘my lord’あるいはmin wine ‘my lord (friend)’というような表現が、物に対してよりも人に対して用いられる方が適切であるという考えを根拠の一部としている。以下では、古英詩における擬人化表現を見ていくことによってこの考えについて検討したい。

rune-staveに対して‘lord’や‘friend’のように言及するのが一般的であるかどうかの判断には、擬人化による表現がどの程度浸透していたかという問題が関わってくる。人間以外の物に対して人間の性質を与える擬人化は様々な時代の文献においてよく見られる比喩の方法であるが、古英

詩も例外ではない。<sup>14)</sup> まず、自然現象はしばしば擬人化の対象となる。例えば *Menologium*, 1.202 以降の季節変化の描写では冬が擬人化され、sigelbeortne genimð/hærfest mid herige hrimes and snawes [1l.203b-204] 「霜と雪の軍隊で太陽輝く秋を捕まえる」という表現が見られる。また、古英詩では海や波も擬人化の対象となり、現代英語においても見られるように船も擬人化されることがある。*Beowulf*, 1.1763 以降ではフロースガール王の訓戒において人間がいずれは衰えることを説く際に、病氣、剣、洪水、槍、死などが、また同じく *Beowulf* では戦いが非常に豊富な表現で多くの場合は戦士と関わる文脈において擬人化されている。他にも古英詩では、様々な物や概念の擬人化の例は枚挙に暇がない。<sup>15)</sup>

英雄詩においては武器の描写がよく見られるが、これらもしばしば擬人化の対象となっている。*Beowulf*, 1.2570 以降にはベオウルフの盾が描写されており、そこでは Scyld wel gebearg/life ond lice/læssan hwile/mærum þeodne [1l.2570b-72a] 「盾は短い間しか主君の命と体を守らなかった」とあり、擬人化された表現となっている。ここで見られる発想は、*HM* において rune-stave に対して使用されている mondryhten min や mines frean と同様のものである。また、*Beowulf*, 1.303 以降では兜に付けられている猪の像に言及した箇所があり、その兜は gūþ-mōd 'war-like (one)' と言ひ換えられ、ferh-wearde hēold 「命を守った」と表現されている。さらに *Beowulf*, 1.1807 以降では、ベオウルフは剣に対して gūþ-wine gōdne 'the war-friend good' と言及しており、この箇所では剣が人格化されている。ここで wine が剣に対して使用されていることは、*HM* において rune-stave に対して用いられている min wine 'my lord (friend)' を思い起こさせる。そしてこの gōdne tealde は一種の定型表現であるとされており、1.2184, gōdne ne tealdaon および 1.2641, gōde tealde のように通常は人間に対しても使用されるものである。<sup>16)</sup>

武器の擬人化が進められた結果、単なる人間の特性だけでなく個別の人格が与えられ、名前が付けられている場合もある。*Beowulf* には名前が付けられている武器がいくつか描写されており、例えば *Hrunting* の場合には通常では人に対して使用される動詞 *dugan* が適用されている。<sup>17)</sup> これらのことは、武器とその所有者に対しても自然に人間の主従関係に対する表現が適用されていることを表すものである。主君と家臣の間の緊密な主従関係の描写は英雄詩の重要なモチーフの一つであり、このような主従関係は所有物とその所有者の描写にも自然と転用されることになったと考えられる。

さらに擬人化を発展させたものとして、*The Dream of the Rood* では擬人化された十字架自体が 1 人称で語るという形式が採用されている。十字架自身が罪人を処刑する十字架として作られた来歴を語り、自分の上で磔にされたキリストの様子を語る形で話が進められる。この擬人化された十字架による語りは、*HM* の speaker が rune-stave だと考えた場合には共通の語りの形式であることになる。また、古英詩 *Riddles* でも多くの場合に解答となる物が 1 人称で語る形式が採用されている。Exeter Book における 95 編の *Riddles* の中では、20 編以上において結びの部分あるいは最終行が *Saga hwæt ic hatte* 「わが名を言って見よ」という定型表現で締めくくられており、これらの擬人化の応用は後に見るように通常の 1 人称の語りにはない効果をもたらすものである。

以上で見てきたように武器や生活用品の擬人化は古英詩では非常に広範囲に見受けられ、また

擬人化された武器などとその持ち主に対しての主従関係を示す表現の応用もしばしば見られるものである。すでに見たHM冒頭の *Ful oft ic on bates* という表現と同様に *rune-stave* の一般的な性質に注目した擬人化表現と考えるならば、*mondryhten min ‘my liege-lord’* や *mines frean ‘my lord’* あるいは *min wine ‘my lord (friend)’* という各表現が *rune-stave* に用いられたとしても全く問題はなく、人間の *messenger* を示唆していると考えざるを得ないといえる。

#### 4 写本における改行

ここでは、*speaker* を特定するにあたり写本に見られる情報を検討したい。*HM* が収められている *Exeter Book* においては *elegy* に分類されている諸作品が順番に書かれているが、それは以下のようにになっている。<sup>18)</sup> *The Wanderer, The Seafarer, The Riming Poem, Deor, Wulf and Eadwacer, The Wife’s Lament, Resignation, The Husband’s Message, The Ruin* の順で並んでおり、これらの間に他の作品が混在している。*Exeter Book* に収録されているこれらの共通のテーマを持つ *elegy* 全体を通して見た場合、人間の *speaker* によって語られていることが多く、ほとんどの作品は人間の *monologue* である。<sup>19)</sup> そこで *HM* における *speaker* を人間であると考えた場合は、この作品は *elegy* ではごく一般的なモノログ形式ということになる。一方で *rune-stave* だと考えた場合は、擬人化された物による語りで進められている特異な作品であることになり、このことは人間の *messenger* 説の支援材料になり得るものである。

しかしながら、ここで写本における作品の順番に関して注目されるのは、*Resignation* と *HM* の間に *Riddle 60* が挿入されていることである。*Exeter Book* は一人の写字生によって書かれたと考えられており、その写字生は手本に対して自らはほとんど変更を加えることのない ‘mechanical copyist’ だったとされている。<sup>20)</sup> 写本では内容の区切りに従って改行がなされており、そのような大文字による改行は手本の写字生によるものであると想定される。そして写本における大文字による改行は *Riddle 60* では冒頭のみである。これに対して、*HM* では冒頭の *Nu* の語頭が大文字で始まり、続いて13行目 *Hwæt* の語頭が大文字となっている。その後は26行目 *Ongin* の語頭2文字が大文字となっているだけである。つまり *HM* 冒頭の12行は大文字による改行によりそれ以降と内容的に分けられていることになる。かつて、この詩の始まりに関する議論<sup>21)</sup> があったことから分かるように、*HM* が擬人化された *rune-stave* の1人称 *monologue* となっていると解釈した場合、*HM* と *Riddle 60* にはトーンの類似性が認められることになる。<sup>22)</sup> 写本における *Riddle 60* と *HM* の配置および改行は、共通する特徴である擬人化された *speaker* による詩という手本の写字生の認識に基づいている可能性があり、これは *speaker* が *rune-stave* であると考えられる根拠となり得るものである。

また、同様に写本において問題となる点として *HM, 150a* の冒頭の単語が挙げられる。これに関しては研究者により写本の解釈が分かれており、通常 *gehyre* あるいは *genyre* と読まれる。*gehyre* ‘hear’ とした場合、人間の *messenger* が誓いを「聞く」という解釈になり、一方 *genyre* とした場合には、‘crowd together in space’ の意味となり *rune-stave* との結びつきが自然となる。

Leslieは自身のエディションにおいて人間のmessenger説にふさわしいgehyreを採用している。しかしながら、R. E. Kaskeは紫外線による撮影を根拠としてgenyreが正しい読みだとしており<sup>23)</sup>、ASPRもgenyreを採用している。その場合は、この動詞の1人称の主語はrune-staveであると考えるのが自然であり、冒頭の来歴と合わせて詩の全体がルーン文字が書かれているrune-staveの語りで統一されているとみなすことができる。

## 5 speakerの来歴と語り

Exeter Bookに収められている一連のelegy<sup>24)</sup>においては、幸福の喪失、荒廃した町、この世の栄華の儂さなどがテーマとして取りあげられており、多くの作品ではこれらのテーマがキリスト教的メッセージと組み合わせられている。例えば*Wanderer*では、この世の富や権力の儂さが説かれ、結びにおいてGod's graceを求める者の幸福が言及されている。また*Seafarer*においても同様で、後半部分のトーンはhomileticであり、この世の栄華が儂いことやhyht in heofonum 'bliss in heaven'の追求が述べられる。一方で、*HM*にはExeter Bookに収められている他のelegyに見られるようなキリスト教的な記述が見られず、全体のトーンが世俗的である。そのためキリスト教的なアレゴリーとしての特殊な解釈を別にすれば、主題は純粹に夫である男性から妻である女性へのメッセージに置かれていると考えられる。

ここで*HM*冒頭においてspeakerの来歴に言及しているic tudre aweoxという表現にもう一度注目したい。すでに見たように、ここにおけるtūdreはtudor 'a child, offspring, fruit'の与格、単数であり、この語は人にも植物にも使用されるものである。また、āwēoxは動詞aweaxan 'to wax, grow'の過去、単数で'grew up'を意味しており、木が育つの意味でも、人が育つという意味でもしばしば用いられる動詞である。このように、tudorおよびaweaxanに関しては人間、植物に共通して用いられるものであるため、どちらの解釈も可能である。つまりspeakerを人間と考えた場合は、'I grew up from childhood'という意味になり、一方、speakerをrune-staveであると考えた場合には、'I grew up from a seed'という意味に解釈されることになる。

しかしながら、ここでtudorを'childhood'であると解釈した場合には、このような記述が存在することに疑問が残る。なぜなら人間のmessengerであるとするならば、このような記述をしなければいけない必然性が低いからである。実際に、人間のmessenger説を採っているLeslieもこの記述に関して、'As it stands, the statement, 'I grew up from childhood', may appear unnecessary, but the whole introductory passage has a highly formal tone.'と述べている。<sup>25)</sup> また、人物のmonologueとなっている*The Wanderer*および*The Seafarer*などではこのような形での出自に関する記述は見られない。*The Wanderer*では現在の逆境と対比される形がかつての繁栄が回顧されており、また*The Seafarer*では船乗りとしての苦しい経験が回顧されているが、上記の出自の言及とは全く異なったものである。*HM*のような出自への言及は、speakerが人間ではないからこそ必要なものであるといえる。

speakerが人物ではないために言及されている出自に関する表現は、*The Dream of the Rood*にお



いても見られるものである。詩の序盤では *þæt wæs geara iu* 「昔のことだった」と十字架自体が語り始め、*þæt ic wæs aheawen holtes on ende, astyred of stefne minum* 「私は森の際で切り倒され、根抜きにされた」と述べられている。この擬人化された十字架自体による語りの形式の利点として M. Swanton は次のように述べている。

The attribution of personality, and therefore volition, allows a moral as well as physical parallel to be established between Christ and the cross. Thus it is that the words of the cross can bring us dramatically close to the events of the crucifixion, enabling the reader to share in a unique imaginative reconstruction of Christ's suffering.<sup>26)</sup>

ここで Swanton が指摘しているように、擬人化された物による語りは人間による monologue にはない効果をもたらすことができる。古英詩における擬人化された物による語りの採用はそのような効果を意図したものであり、人間が語る場合とは異なる perspective を与えているといえる。

古英語の narrative poetry の多くにおいては、mamelode formula に代表されるような direct speech が大きな割合を占めている。Elise Louviot のカウントによれば、*Guthlac A*, 36.4%, *Beowulf*, 38.7%, *Elene*, 40.7%, *Christ and Satan*, 42.7%, *Genesis B*, 50.2%, *Andreas*, 52.5%, *Juliana* では 61.3% に達する。<sup>27)</sup> これらのような direct speech の割合が多い詩と違い、monologue による HM のような詩においては、audience が物語をどのように聴くかということに詩人による語り手の選択が密接に関わってくる。1人称の場合にはそれがどのような人物であるのかによって、物語のトーンも変化することになるのである。

夫である男性から妻である女性へのメッセージという一連のエレジーの中で独特のテーマは、ルーン文字のメッセージが書かれている rune-stave 自らによって語られることで際立つこととなる。HM 冒頭で述べられる *ic tudre aweox* は、擬人化された十字架が語る *The Dream of the Rood* における記述 *þæt ic wæs aheawen holtes on ende, astyred of stefne minum* と同じ発想に基づいた表現であり、speaker が人間の messenger ではないからこそこのような出自の説明が必要であったと考えられる。

## まとめ

HM の中で speaker に対して使用されている語彙のみに基づいて speaker を特定することは適切ではなく、写本の情報や詩の内容および speaker の出自への言及を考慮するならば人間の messenger であると考えた必然性は見当たらない。夫から妻へのメッセージの伝達というこの詩の主題は、伝達手段である rune-stave 自身によって語られていると考えるのが自然である。

注

- 1) 古英詩からの引用はすべて George Phillip Krapp and Elliott van Kirk Dobbie, ed., *Anglo-Saxon Poetic Records*, 6vols. (New York: Columbia University Press, 1931-53) に拠った。また、本稿における古英語の訳は特に言及のない場合は筆者による。
- 2) R. F. Leslie, *Three Old English Elegies* (Exeter: University of Exeter, 1988), pp. 13-14.
- 3) Leslie, p. 14.
- 4) Leslie, p. 14.
- 5) Leslie, p. 14.
- 6) Stanley B. Greenfield, *The Interpretation of Old English Poems* (London: Routledge and Kegan Paul, 1972).
- 7) Margaret E. Goldsmith, 'The Enigma of The Husband's Message', *Anglo-Saxon Poetry: essays in appreciation for John C. McGalliard*, edited by Lewis E. Nicholson, Dolores Warwick Frese. (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1975).
- 8) Earl R. Anderson, 'Voices in The Husband's Message', *Neuphilologische Mitteilungen*, 74(1973), 'The Husband's Message: persuasion and problem of "genyre"', *English Studies*, 56(1975).
- 9) Peter Orton, 'The Speaker in The Husband's Message', *Leeds Studies in English* 12(1981).
- 10) 古英語語彙の意味および用法については Joseph Bosworth and T. Northcote Toller, *An Anglo-Saxon dictionary*, (London: Oxford University Press, 1898; supplement by T. N. Toller 1921) を参照。
- 11) 通信手段としての rune-stave への言及としては、詩人で Bishop of Poitiers の Venantius Fortunatus が友人に返信を促している次のようなメッセージがある。Barbara fraxineis pingatur runa tabellis, quodque papyrus agit, virgule plana valet. 'You may also paint barbaric runes on tablets of ash wood; what papyrus achieves a smoothed wooden staff can do as well'. (R. W. V. Elliott, *Runes* (Oxford: Manchester University Press, 1959), p. 89.) また、通信の目的で用いられた rune-stave についての考古学的証拠としては、Bergen で発見された 500 以上にもぼるルーン碑文が存在する。これらは *HM* に描かれている通信手段としての rune-stave が文学的な創作というわけではなく、かつて実際に使用されていたものであることを示すものである。
- 12) Orton, p. 45.
- 13) Orton, p. 46.
- 14) Francis B. Gummere, *The Anglo-Saxon Metaphor* (Halle: E. Karras, 1881), pp. 45-51. では古英詩における擬人化の用例を多く挙げている。また、Neil D. Isaacs, 'The Convention of Personification in Beowulf' in Robert P. Creed (ed.), *Old English Poetry: fifteen essays* (Providence: Brown University Press, 1967) は *Beowulf* における擬人化の用例を考察している。
- 15) 擬人化の用例は文学作品だけに限られているわけではなく、アングロサクソン時代の碑文にも擬人化を含む定型文が多く見られる。アングロサクソン時代の非ルーン碑文に関しては Elizabeth Okasha, *Hand-List of Anglo-Saxon Non-Runic Inscriptions* (Cambridge: Cambridge University Press, 1971) を参照。
- 16) Isaacs, p. 222.
- 17) Isaacs, p. 221.
- 18) Exeter Book の写本ファクシミリについては、Anne L. Klinck, *The Old English Elegies: a critical edition and genre study* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 1992) を参照。
- 19) *The Wanderer* の speaker に関する議論については、Klinck, pp. 30-31 を参照。

- 20) Klinck, p. 21.
- 21) 写本において先行している *Riddle 60* との類似点が見られたことから、かつては *HM* がどこから始まるのかということも議論されていたが、現在では一般的に *Nū* から始まるものとされている。
- 22) テーマが相補的だったために anthologist がこれらの詩を一緒に記したと推測される。(Bernard J. Muir, *The Exeter Anthology of Old English Poetry* (Exeter: Liverpool University Press, 2000), p. 694.)
- 23) R. E. Kaske, 'The Reading genyre in The Husband's Message, line 49', *MÆ*, XXXIII(1964), pp. 204-206.
- 24) 古英詩諸作品への *elegy* という用語の適用に関しては、Klinck, pp. 11-12 を参照。
- 25) Leslie, p. 59.
- 26) Michael Swanton, *The Dream of the Rood* (Exeter: University of Exeter Press, 1996), p. 68.
- 27) Elise Louviot, 'Transitions from Direct Speech to Narration in Old English Poetry', *Neophilologus*, Vol. 97(2) (2013), pp. 383-4.